

「ウィ・テ・ナーフ」についての一考察

What is “Wite’ Naah” in the Classic Maya Lowlands ?

Takahiro Sato

1、はじめに

古典期前期の500年頃以前、および古典期後期の650年頃以降、マヤ低地南部の特定の都市のモニュメント等に生起する二種類の文字がある。いずれも「ウィ・テ・ナーフ」「Wite’ Naah」と呼ばれているこの文字は、当初シーリScheleによって「創立者の印 (Founder’s Sign)」、その後スチュアートStuartによって「木の根の家 (Tree-Root House)」と訳され、現在では「起源の家 (Origin House)」という意味を持つと一般に考えられている (Fash, et al. 2009:212; Stuart 2004:237)。

近年マヤ学の世界で盛んな議論の対象になっている事柄の一つに、古典期前期の低地南部マヤ社会とメキシコ中央高原のテオティワカンTeotihuacanとの間にどのような関係があったのか、という問題がある (Braswell 2003)。とりわけ重要なのが、378年のティカルTikalの政変や、426年のキニチ・ヤシュ・クック・モ K’inich Yax K’uk’ Mo’によるコパンCopán王朝の創立であり、いずれにおいてもテオティワカンが直接的あるいは間接的にかかわっていたのではないかと推測されている。私自身も、以前これらの問題について自分なりの考えをまとめたことがある (佐藤 2004、2005)。ウィ・テ・ナーフ文字に関しても、「木の芽の家 (Sprout Tree House)」(Sharer 2003a:328) や「根の家 (Root House)」(Martin and Grube 2000:192) と解釈されているのを受けて、これはリネージないし王朝を植物にたとえたものであり、ウィ・テ・ナーフはキニチ・ヤシュ・クック・モが即位した建物を指すとともに、彼が創始した王朝そのものも表している、と推測した (佐藤 2005 : 78)。

このウィ・テ・ナーフ文字は、マヤ地域とテオティワカンとの間にどのような関係があったのかという問題を考察する上で、きわめて重要な役割を果たす可能性がある。と言うのも、この文字の存在は、マヤ地域で新王朝が創立される際、テオティワカンが政治的あるいは軍事的に関与していたことを示唆するものとしばしば解釈されるからである (Freidel et al. 2007a:193)。本論考では、そもそもウィ・テ・ナーフ文字がどのような意味を持つものであり、その生起が何を表すのかを、実例を分析することによって考察したい。

2、古ウィ・テ・ナーフ文字

(1) ウィ・テ・ナーフ文字の二異形

先にも述べたように、現在ウィ・テ・ナーフと解釈されている文字には、二種類の異形がある (図 1)。この両者の生起には、時期的に明瞭な違いがある。すなわち、古いものは500年以前に生起し、

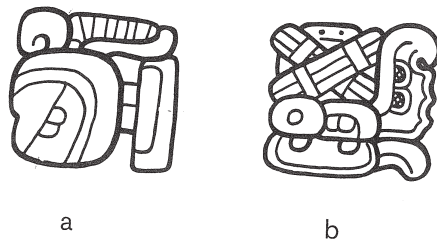


図1 「古ウィ・テ・ナーフ文字」(a)と「新ウィ・テ・ナーフ文字」(b) (Fash et al. 2009 Figure 10.を一部改変)

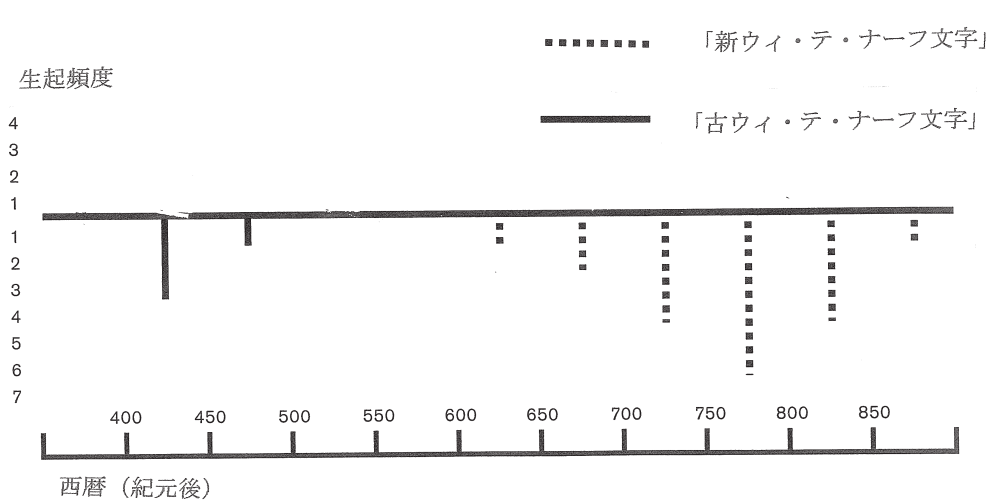


図2 「古ウィ・テ・ナーフ文字」と「新ウィ・テ・ナーフ文字」の生起の変移 (Fash et al. 2009 Figure 9.を一部改変)

新しいバージョンは650年以降に用いられる（図2）。また、その間の約150年間は、いずれの文字も見られない（Fash et al. 2009:218-219）。本論考では、この異なる主字を持つ両者を、便宜的に「古ウィ・テ・ナーフ文字」「新ウィ・テ・ナーフ文字」と仮称して別々に扱い、それぞれどの場所でもどのような文脈で使われているのかを、具体的事例を挙げて考察したい。

まず、古ウィ・テ・ナーフ文字であるが、もう一つの異形と異なり、発音上明らかに「ウィ・テ・ナーフ」と読めることが確定している（Stuart 2004:236）。逆に、後の「新ウィ・テ・ナーフ文字」のように、「交差した束」が主字に用いられることは決してない（図1 b）。なお、この時期の「ウィ」「wi」と読まれる文字と「交差した束」文字が同義であることは、ヤシュチランYaxchilánのリンテル25のテキスト（図3）で確認されている（Fash et al. 2009:218; Martin and Grube 2008:125; Stuart 2004:236）。と言うのも、ヤシュチラン王イツァムナーフ・バフラムItzamnaaj Bahlam 3世の妃カバル・ショークK'abal Xook妃に言及するテキストに、“wi-T600-te'-naah”と綴られた文字が生起しているからである。マヤ文字の綴りの原則の観点から、この文字は“T600-te'-naah”文字と同義であると考えられる。従って、T600すなわち「交差した束」文字は、「ウィ」と置換可能な同義の文字だと言えるのである。

（2）古ウィ・テ・ナーフ文字の諸例

①ティカル Tikal の石碑31

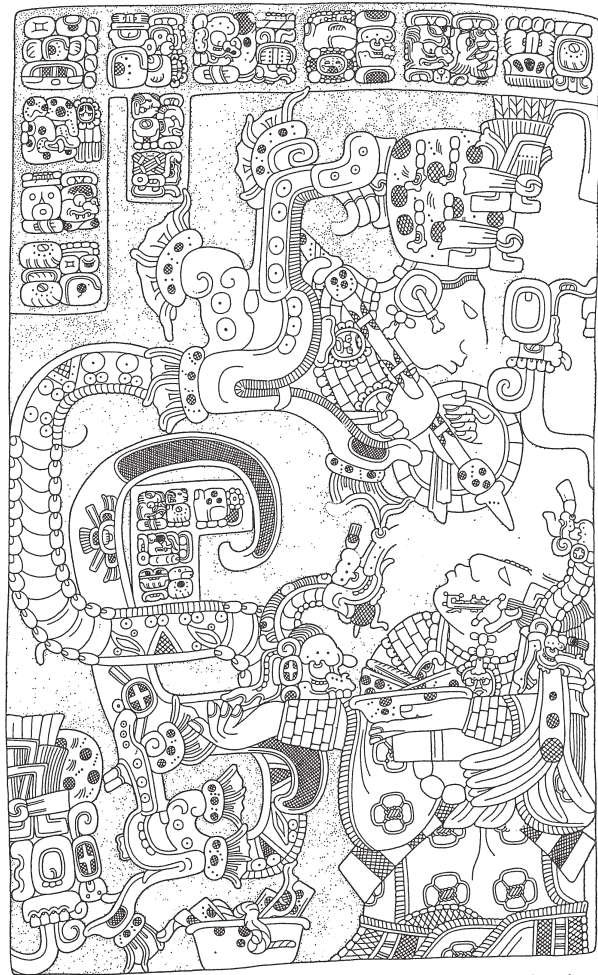
445年に奉納されたティカルの石碑31には、古ウィ・テ・ナーフ文字の最古の生起例が見られる（図4）（Stuart 2004:237）。碑文によると、ヤシュ・ヌーン・アヒーンYax Nuun Ahiinは、前王チャク・トック・イチャークChak Tok Ich'aak1世が8.17.14.12 11エブEb 15マックMak（378年1月15日）に死去した283日後にウィ・テ・ナーフに上がり、61日経ってウィ・テ・ナーフから降りる。さらに261日後、ウィ・テ・ナーフで即位し、シフヤフ・カフクSihyaj K'ahk'の眼前で28の地域を得た¹（Fash, et al. 2009:217; Schele and Freidel 1990:450; Schele and Mathews 1998:79; Stuart 2000:509）。この文脈からは、ウィ・テ・ナーフが即位に必要とされる重要な儀式を行うための建物であったと考えられる。

②エル・ペルー El Perúの石碑15

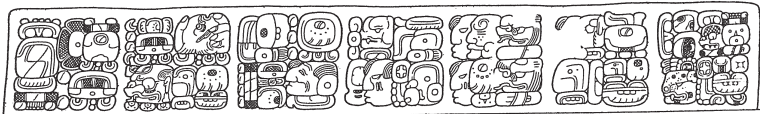
ティカルの西方74kmに位置するエル・ペルー²は、先古典期終わりあるいは原古典期に勃興した都市であり、エル・ミラドールEl MiradorやナクベNakbeが滅亡したこの時期のミラドール盆地の変動との関連が、その防御的立地からも窺える（Freidel y Escobedo 2004:415; Guenter 2005:365）。王や王妃の肖像が刻まれた40以上の石造モニュメントを有し、およそ700年の間に少なくとも20人以上の王の治世が知られている（Guenter 2005:359）。

¹ ti ajawliil mam k'uh[ul] Kukal ajaw Yax Nuun Ahiin uch'amaw waxak winik pet u...ukab'jiiy] Sihyaj K'ahk' uhtiiy wite' naah「尊きティカルの神聖王ヤシュ・ヌーン・アヒーンが王位に座す；彼は28の地域を得る；…それはシフヤフ・カフクの命による；それはウィ・テ・ナーフで起こる」（Estrada-Belli, 2009:243）。

² 本来の名称はワカWaka'だったことが知られている。



Lintel 25



Lintel 25 front edge

図 3 ヤシュチランのリンテル 25 (Tate 1992 98.を一部改変)



図4 ティカルの石碑31の碑文の一部 (Schele and Freidel 1990 FIG. 4:21 を一部改変)

しかし、エル・ペルーが古典期マヤの歴史上で重視されるのは、378年の「エントラダ Entrada」の主演であるシフヤフ・カフクが、ティカルに到着する8日前の8.17.1.4.4 3カンK'an 7マック(378年1月6日)に立ち寄った都市であることによる。シフヤフ・カフクの出自や動向、及びこの出来事の真相を解明する上で鍵となる遺跡なのである(Guenter 2005:366; Martin and Grube 2008:29)。

415年に建立された最古の石碑15には、シフヤフ・カフクの到着と共に、彼を受け入れたキニチ・バフラムK'inich B'ahlam 1世が、ウィ・テ・ナーフで何らかの重要なことを行ったことも記されている(図5)(Freidel y Escobedo 2004:412; Freidel et al. 2007a:193-194)。フレイデルFreidelらは、このウィ・テ・ナーフは、石碑の背後にある建物N12-15のことを指すと推測しているが、少なくとも文脈からこの都市内にある建物であることは間違いない。なお、エル・ペルーでは、500年頃建立されたと推測されている石碑9でも、ウィ・テ・ナーフ文字が生起している(Guenter 2005:371)。この石碑にもキニチ・バフラムの名が刻まれているので、ウィ・テ・ナーフは彼との関連で言及されたものであろう。

③フナルHunal墳墓出土の楕円形の貝製胸飾り

コパンの神殿16の内部に設けられた墓室フナルで出土した楕円形の貝製胸飾りの表面には、「ユ・ハ・ウィ・テyu-ha WI-TE」という文字が刻まれている(図6)(Stuart 2004:232)。「ユ・ハ」が「～のネックレス」と言う意味だと解釈できるとすると、それに続く文字は明らかにこの貝飾りの所有者の名前のはずである。つまり、ここではウィ・テ・ナーフが人名を指すものとして使用されている。この墓の被葬者は、コパンの初代王キニチ・ヤシュ・クック・モと推定されているので、ここでのウィ・テ・ナーフはキニチ・ヤシュ・クック・モの異名である。このことは、古典期後期のテキストからも立証される。すなわち、そこではキニチ・ヤシュ・クック・モのことを、「ウィ・テ・ナーフの男」あるいは「ウィ・テ・ナーフの王」と呼んでいるのである。また後世の王が、自分が始祖から何代目かを表す際に、キニチ・ヤシュ・クック・モの名の代わりにウィ・テ・ナーフ文字を用いている例も見られる³(Stuart 2000:492-493, 2004:235-236)。ウィ・テ・ナーフという建物で即位し、新王朝創立という重要事を成し遂げた先祖に対して、即位の場であり、従って新王朝誕生の場であるウィ・テ・ナーフを特別な呼称として用いたのかも知れない。

④トレス・イスラスTres Islasの石碑2

トレス・イスラスは、パシオンPasión川流域、セイバルSeibalとカンクエンCancuénの中ほどよりやや上流に位置する遺跡である(図19)。

ここの石碑1、石碑2、石碑3には、王と見られる三人の人物の肖像と共に、碑文に8.18.0.0.0 12アハウAjaw 8ソツSots'(396年6月8日)から9.2.0.0.0 4アハウ 13ウォWo(475年5月15日)までの日付が刻まれている(図7)(García-Gallo 2011:210)。描かれている人物のうち二人

³ ただし、この場合に用いられているのは新ウィ・テ・ナーフ文字である。

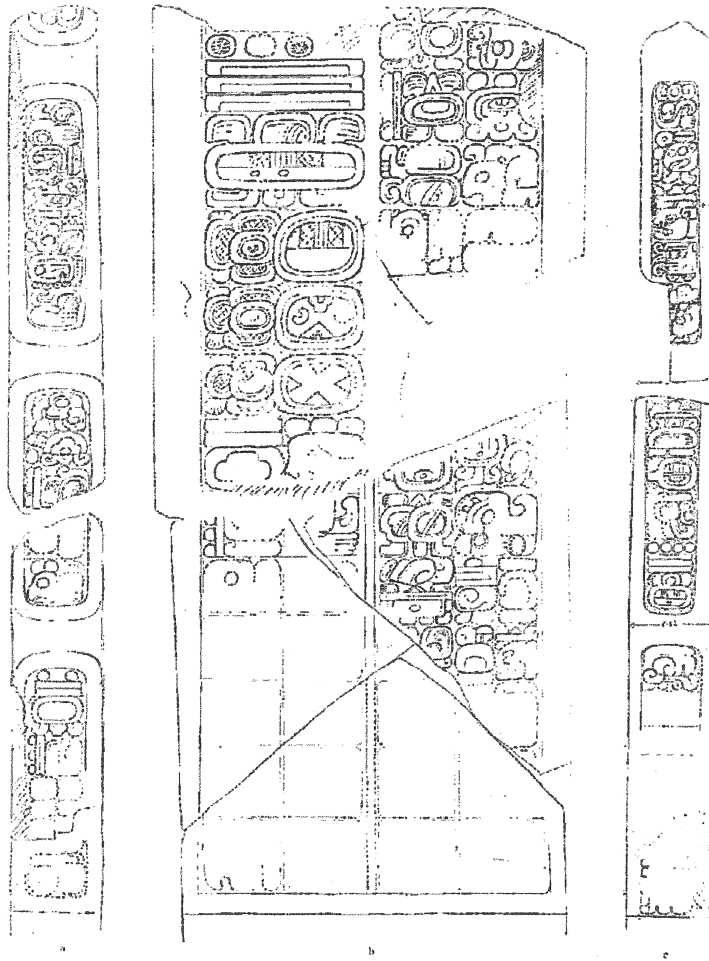


図5 エル・ペルーの石碑 15 (Guenter 2005 Figura 3.を転載)



図 6 コパン出土の貝製胸飾り (Bell, et al. 2004 Plate 4 を一部改変)

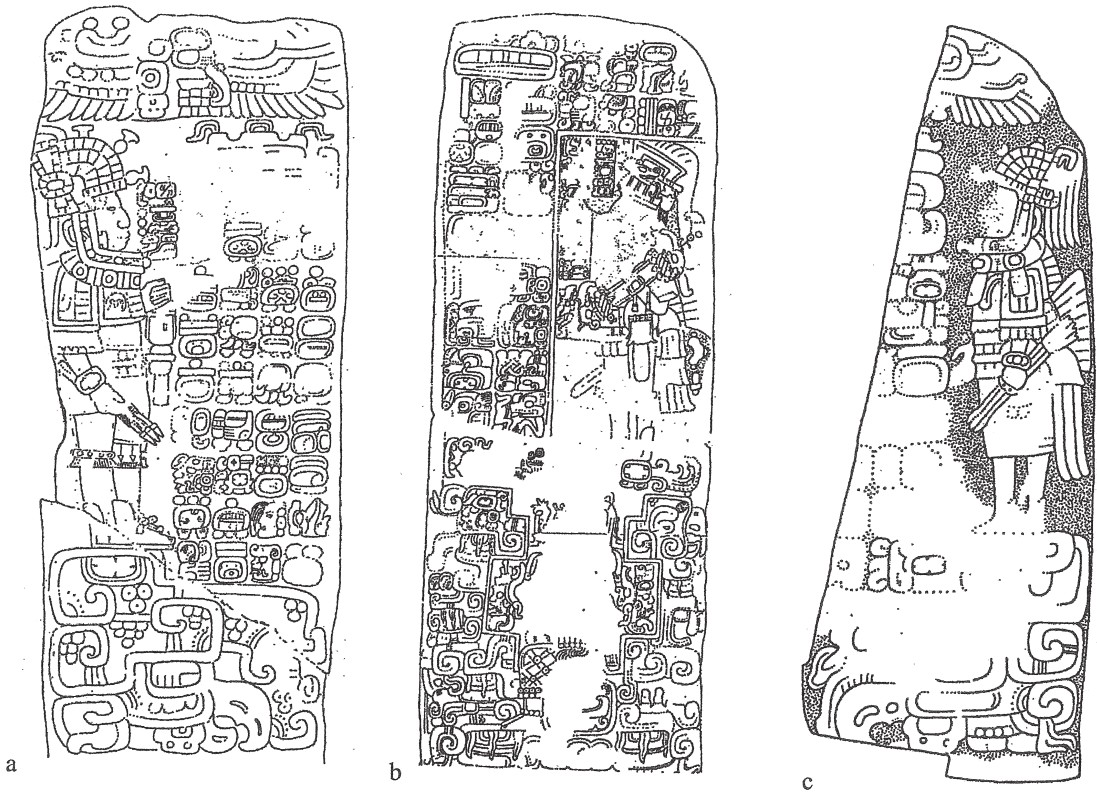


図7 トレス・イスラスの石碑1 (a)、石碑2 (b)、石碑3 (c) (García-Gallo 2011 Figura 4を転載)

は、近隣のマチャキラー Machaquiláとカンクエンの王である。残る一人は、9.2.0.0.0に建立された石碑2の碑文の中で、「第四代継承者、ウィ・テ・ナーフ王(アハウ)」⁴と表現されている(Stuart 2004:237)。ここでは、通例国名が来る所にウィ・テ・ナーフが現われている。少なくとも、儀式が行われる建物を指すとは思えない。

(4) 古ウィ・テ・ナーフ文字の意味

以上の諸例について、ここで整理してみよう。まず、「ナーフ」の原義が建物である以上、少なくとも狭義ではウィ・テ・ナーフは何らかの特別な目的のための建物だと解釈すべきであろう(Stuart 2004:233)。ティカルの石碑31とエル・ペルーの石碑15の場合、ウィ・テ・ナーフは明らかに儀式が行われる建物を指している。とりわけティカルの事例からは、即位にかかわる施設だと思われる。また、エル・ペルーの石碑15の碑文から判断すると、この建物は都市の中核に位置している可能性が高い。

他方コパンでは、ウィ・テ・ナーフは王朝創立者キニチ・ヤシュ・クック・モの異名として使われている。ウィ・テ・ナーフが、即位儀式が行われる建物であり、とりわけ王朝創始に密接にかかわっているとすると、この建物の名前を敷衍して当事者の呼称として用いたということが考えられる。これらと対照的なのが、トレス・イスラスの事例である。ここでは、明らかに建物ではなく、国名と思われる用いられ方をしている。

3、新ウィ・テ・ナーフ文字

(1) 新ウィ・テ・ナーフ文字の諸例

T600は、薪を表すと見られる交差した束の上に、二つの点とその下に水平の棒が描かれた丸顔状のものが乗っている文字である(図1)(Fash, et. al 2009)。このT600を主字として用いたウィ・テ・ナーフ文字は、コパン、キリグアー Quiriguá、ヤシュチラン、マチャキラーなど様々な場所で見られる(Stuart 2004:236)。

①ティカルのMT (Miscellaneous Texts) 35

古典期後期にティカルを繁栄へと導いたハサウ・チャン・カウィール Jasaw Chan K'awiil 1世(682年即位)の墳墓から出土した錐状の骨製品に刻まれたMT35に、「交差した束の建物」が、ヤシュ・ヌーン・アヒーンが即位の数か月も前に何らかの行為を行う場所として言及されている(図8)(Stuart 2000:493)。従って、この「交差した束の建物」は即位に関連する儀式の場と考えることができる。

②コパンの祭壇Q

ヤシュ・パスアフ・チャン・ヨパート Yax Pasaj Chan Yopaat王が9.17.5.0.0.0 6アハウ 13カヤブ K'ayab (775年12月29日)に建立した祭壇Qには、側面に初代キニチ・ヤシュ・クック・モからヤシュ・パスアフ・チャン・ヨパートに至る16人の王の肖像が彫られ、上部の平らな面には王朝の歴史を記し

⁴ chan tz'akb'uul Wite'naah ajaw (García-Gallo 2011:210)。

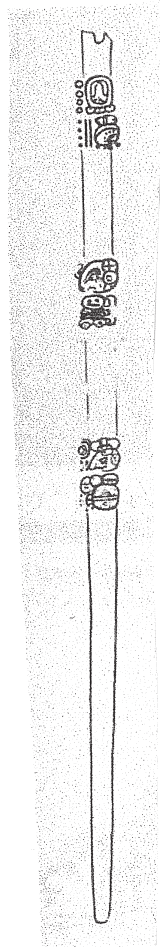


図8 ティカルのMT35 (Trik 1963 Fig. 13を転載)

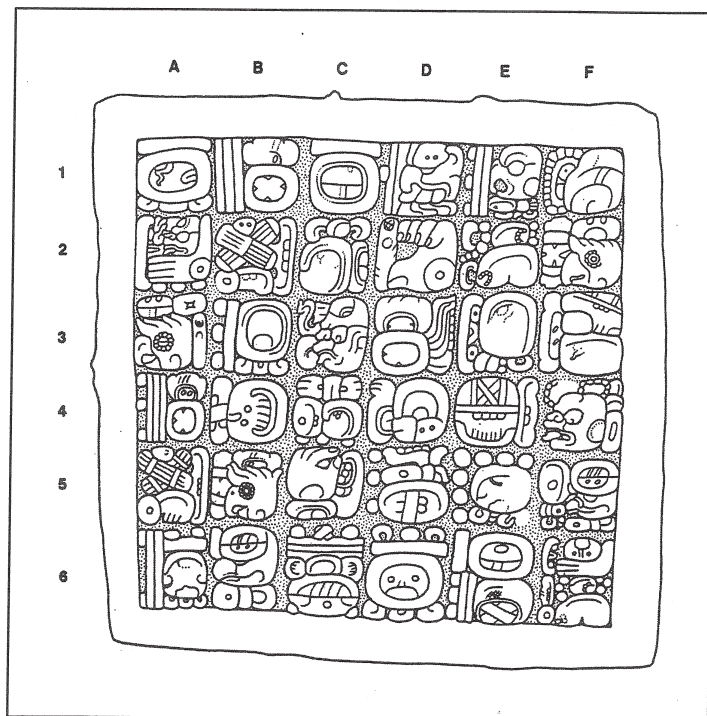


図 9 コパンの祭壇 Q の上面テキスト (Stuart 2004 Figure 11.7 を転載)

た文字テキストが刻まれている（図9）。この中に、426年に起こった出来事に関して、二つの日付と共に興味深い記述が見られる。

先ず、A 1 から A 3 にかけての部分は、8.19.10.10.17 5カーバンKaban 15ヤシュキンYaxk'in（426年9月5日）に、クック・モ・アハウK'uk' Mo' Ajawと言う名の人物が、「交差した束」を主字とし、「テ・ナーフ」“te-naah”を接辞に持つ文字の地で、「チャム・カウィール」“ch'am-K'awil”，すなわち「カウィールをつかんだ」と記されている⁵（Martin and Grube 2008:192-193; Sharer 2003a:328-329; Stuart 2000:491-492, 2004:233）。カウィールとは、パレンケPalenque三神のG II、シェルハスSchellhasによる神々の分類の「神K」に相当する神で、稲妻、火、王朝の始祖と深くかかわりをもっているとされる（Miller and Taube1993:147）。古典期の図像の中で、王がこの神の形をした笏を握った姿でしばしば描かれていることから、「カウィールをつかむ」とは即位と同義だと考えても良いであろう。

その3日後、キニチ・ヤシュ・クック・モがウィ・テ・ナーフにやって来た、とある⁶。クック・モ・アハウがウィ・テ・ナーフでカウィールをつかんだ後に新しい地位につき、キニチ・ヤシュ・クック・モと名を改めたことは自明であろう。

さらにその152日後、ヤシュ・クック・モがオシュ・ウィティクOx Witikに到着したことが述べられている。オシュ・ウィティクとはコパンの本来の地名だと考えられているので、キニチ・ヤシュ・クック・モはコパンから遠く離れた地のウィ・テ・ナーフで王に即位した後、コパンに来たことになる⁷。キニチ・ヤシュ・クック・モが外来者であり、武力でコパンを征服し、新たな王朝を開いたことは明確になっている。フナルの被葬者の骨のストロンチウムの分析から、彼がティカルも含むペテンPetén地方周辺の出身であることもわかっている⁸（Fash 2001:84; Sharer 2003a:340, 2003b:152, 158-159; Traxler 2001:59-60）、クック・モ・アハウが即位したウィ・テ・ナーフはペテン地方及びその周辺の遺跡にあった可能性がある。いずれにせよ、この場合のウィ・テ・ナーフは、明らかに即位儀礼に関連する建物である。

③コパンの石碑12

碑文中、キニチ・ヤシュ・クック・モの名の後に、コパンの紋章文字とウィ・テ・ナーフ・アハウの文字が続いている（図10）（Stuart 2004:235 Figure 11.13）。これは、キニチ・ヤシュ・クック・モがウィ・テ・ナーフで即位儀礼を挙げた王朝の初代王であることを明示する意図があることを示すものであろう。石碑12は9.11.0.0.0 12アハウ 8ケフKeh（652年10月14日）のカトゥン完了を祝って、カフク・ウティ・ウィツ・カウィールK'ahk Uti' Witz' K'awil王が建立したモニュメントである。従っ

⁵ “u ch'am K'awil wi te na K'uk' Mo' Ajaw”（Sharer 2003a:328）。

⁶ “tali wi te na K'inich Yax K'uk' Mo'”（Sharer 2003a:328）。

⁷ この旅行に関しては、メソアメリカで新王朝が創立される際に語られる物語の原型的特徴を備えているとの指摘もある（Martin and Grube 2008:193）。この解釈が正しいとすると、遠く離れたウィ・テ・ナーフの地は神話的存在であり、場所を探求すること自体に意味がないことになる。

⁸ スチュアートは、コパンの石碑63の碑文の分析から、キニチ・ヤシュ・クック・モがカラコルCaracol王であったと指摘している（Stuart 2007）。カラコルは、現在の国の区分ではペリーズ領になるが、グアテマラのペテン地方に近接しており、ストロンチウムの分析とは矛盾しないと思われる。

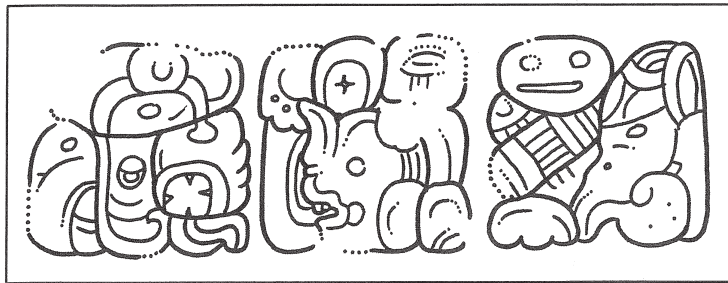


図 10 コパンの石碑 12 のテキストの一部 (Stuart 2004 Figure 11.13 を転載)

て、ここに刻まれた新ウィ・テ・ナーフ文字は、最初期の生起の事例といえる。

④コパンの建物10L-16と建物10L-29

コパンの建物10L-16のファサードにT600文字が刻まれており、タウベTaubeとスチュアートはこここそがウィ・テ・ナーフだと考えている（Fash et al. 2009:211-216）。

また、その少し南に位置している建物10L-29の南のファサードの下部にも、T600をかたどったモザイク彫刻が見られる（図11）。700年から750年頃に建設されたこの建物は、祖先崇拜の社と考えられているので、T600文字は王朝創立者のキニチ・ヤシュ・クック・モを象徴しているのかも知れない（Andrews and Bill 2005:265-269）。

⑤リオ・アマリージョ Rio Amarilloの建物5

コパンから30kmほど離れた所に位置する衛星都市リオ・アマリージョの古典期後期の建物5の外壁も、④で述べたのと同様に、大きなT600文字で飾られている（図12）（Fash et al. 2009:216; Stuart 2000:493, 2004:238）。リオ・アマリージョがコパン王家の分家の拠点であったことを考えると、本家のコパンの初代王キニチ・ヤシュ・クック・モを記念する建築物であることを示しているのかも知れない。

⑥キリグアーの動物形態碑⁹P

9.18.5.0.0 4 アハウ 13ケフ（795年9月15日）に建立されたキリグアーの動物形態碑Pには、コパンの祭壇Qに刻まれているのと同じ日付の8.19.10.10.17 5カーバン 15ヤシュキン（426年9月5日）に、キニチ・ヤシュ・クック・モがウィ・テ・ナーフに来たことが記されている（図13）（Looper 2001:Fig. 29; Sharer 2003a:329; Stuart 2000:492）。その3日後、キリグアーの王がキニチ・ヤシュ・クック・モの監督下で、石製モニュメントを奉獻している。キニチ・ヤシュ・クック・モの是認のもと、自分がキリグアーの支配者になったしるしの記念碑を建立したのであろう。この日付は、キニチ・ヤシュ・クック・モが即位した日である。従って、この場合のウィ・テ・ナーフは、即位儀礼の建物のことを指すのであろう。

⑦オブレゴンの木箱

メキシコのタバスコTabasco州東部、テノシケTenosique近郊のアルバロ・オブレゴンÁlvaro Obregónの洞窟で出土した木箱に、文字の様式から8世紀のものと見られるテキストが記されている¹⁰（図14）（Anaya 2006）。この中で、ウィ・テ・ナーフのアハウと「西のカロームテ」“Ochkin Kaloomte”の称号を持つ人物として、タフーム・ウカブ・トゥーンTajoom Uk'ab Tuunの名が言及されている（Anaya et al. 2002, 2003:4-5; Fash et al. 2009:217; Martin and Grube 2008:141）。この名は、ピエドラス・ネグラスPiedras Negrasのパネル2にも生起している。ここでは、ピエドラス・ネグラスの「亀の歯」王が、9.3.16.0.5 8チクチャンChicchan 3ケフ（510年11月11日）にテオ

⁹ キリグアーで見られる砂岩でできた巨大な記念碑。表面には、文字や王の肖像のほかに、ジャガー、カメ、ワニのレリーフなどが刻まれているためこの名がある。

¹⁰ 洞窟は、エリートによる重要な祖先崇拜の儀礼の場であった。このため、マヤ南部低地では様々な奉納物が洞窟で出土している（Demarest 2013:375）。

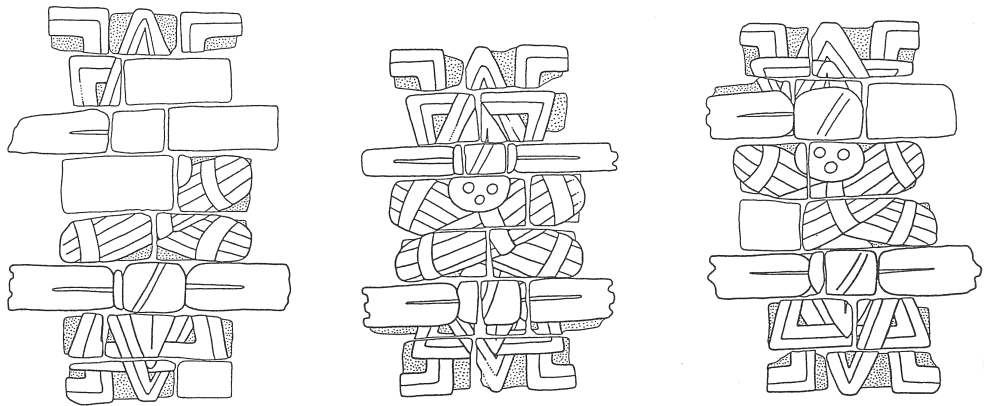


図 11 コパンの建物 10L-29 のモザイク彫刻 (Fash et al. 2009 Figure 7.を転載)

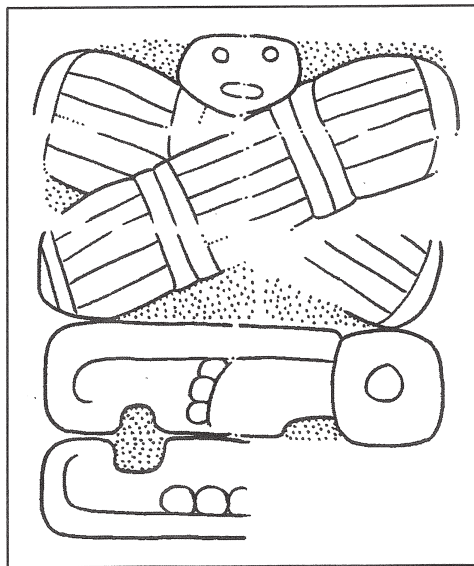


図 12 リオ・アマリージョの建物 5 正面の「交差した束」文字 (Stuart 2004 Figure 11.15 を転載)

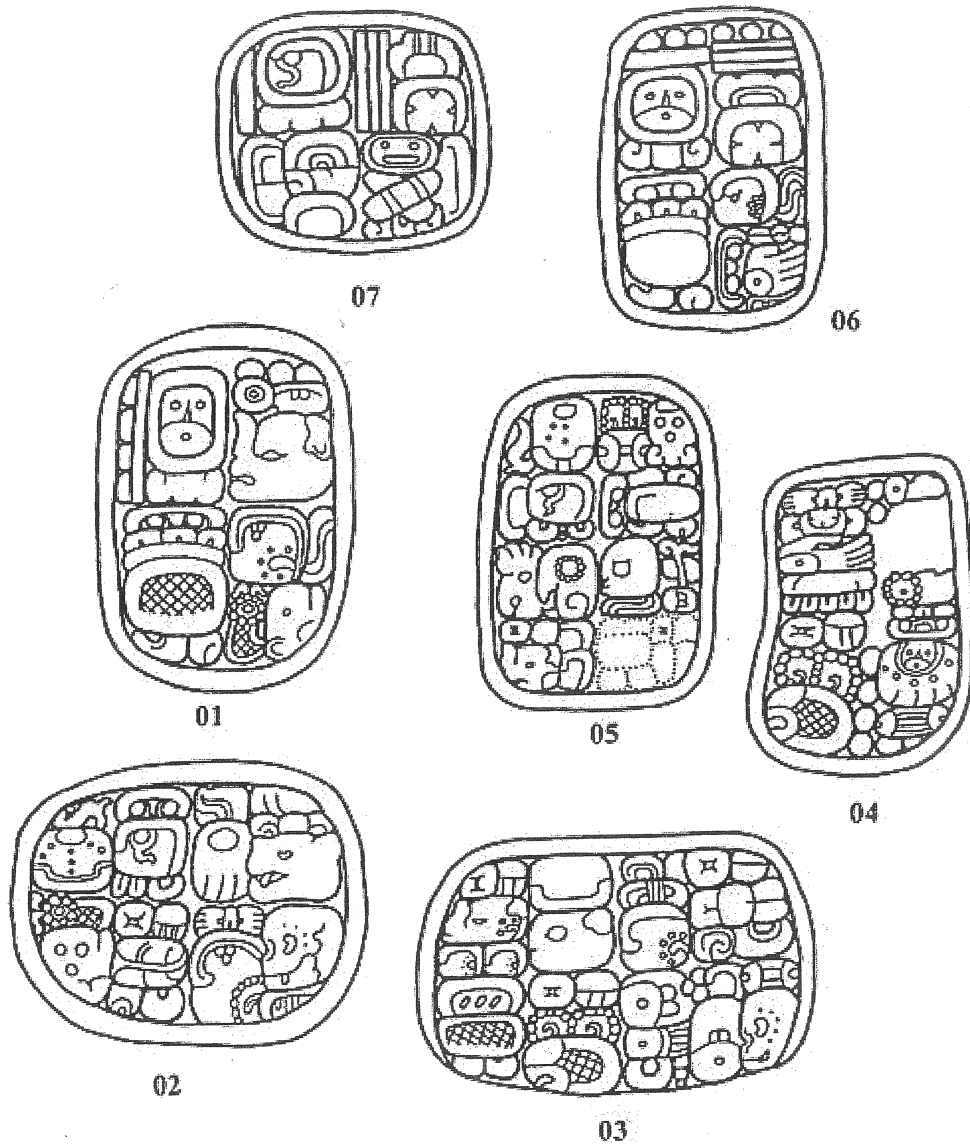


図 13 キリグアの動物形態碑 P のテキストの一部 (Looper 2001 Figure29.を一部改変)

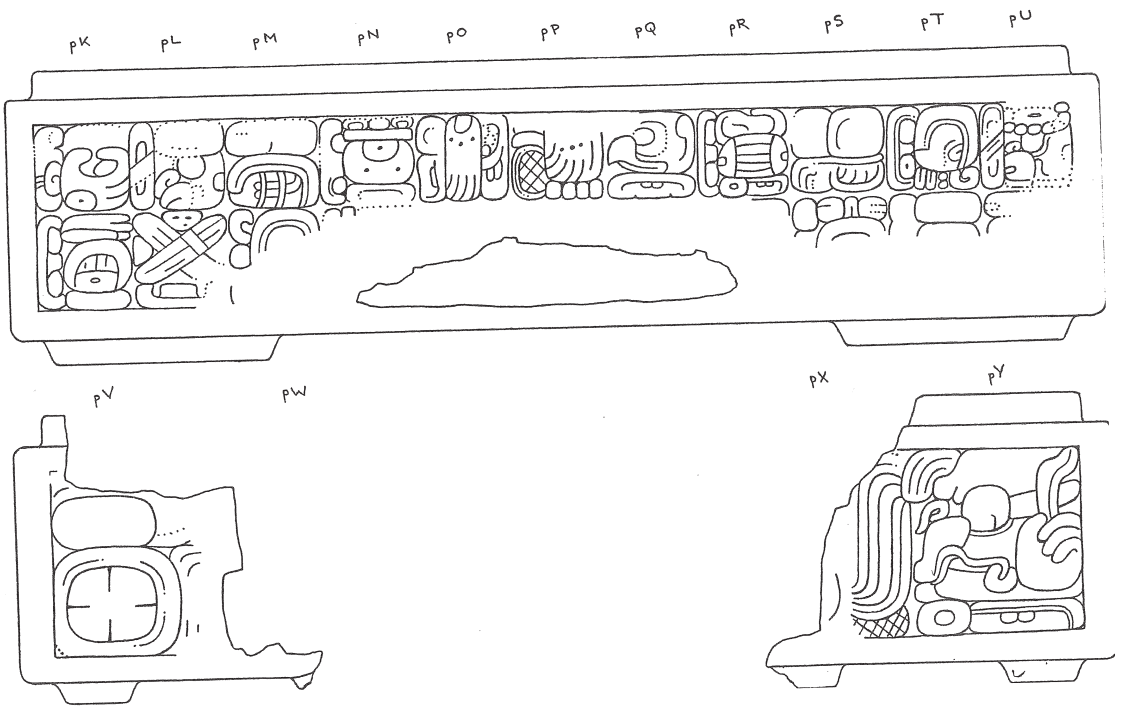


図 14 「オブレゴンの木箱」のテキスト (Anaya, et al. 2002 を転載)

ティワカン様式の頭飾りである「コハウ」“ko'haw”を受け取り、それを支配下にあるヤシュチラン、ボナムパックBonampak、ラカンハー Lacanháの各王に授与するという儀式を行った際に、それを監督した西のカロームテの称号を持つ人物として言及されている。つまり、6世紀初頭のピエドラス・ネグラスのテキストで単に西のカロームテとして言及されたタフーム・ウカブ・トゥーンに、恐らくは数世紀後のテキストでは、西のカロームテだけでなく、新たにウィ・テ・ナーフのアハウと言う称号が付け加えられているのである。この場合のウィ・テ・ナーフは、国名として用いられているようである。もし国名であるならば、木箱の出土地や上記諸都市の位置関係に鑑みると、ウスマシクタUsumacinta川流域の国家であろうか。あるいは、「亀の菌」王がコハウを受け取るために155日間旅をしたと記されているので(Martin and Grube 2008:217)、タフーム・ウカブ・トゥーンの国がそこにあるとすると、ティカルのような遠隔地の国家であろうか。古典期前期にはティカルやカーンKaan王国のような例外的な大国の王のみが称すことが出来た「西のカロームテ」という特別な称号も、この木箱が製作されたと見られる古典期後期には、ヤシュチラン、マチャキラー、プシルハー Pusilhá、ウカナルUcanalなど、大国とは言えない国家の王も自称するようになるため(Tokovinine 2008:238-239)、国家を特定するのは困難である。

⑧ヤシュチランのリンテル25

ヤシュチランのリンテル25の碑文には、4世紀後半に統治したとみられるイツァムナーフ・バブラム1世が即位する場所として、ウィ・テ・ナーフが言及されている(図3)(Stuart 2000:493)。すなわち、即位儀礼の場である。

⑨マチャキラーの石碑3

パシオン川の一支流であるマチャキラー川に面し、カンクエンの北東45km、セイバルの南東30kmほどの所にあるマチャキラーの石碑3の碑文で(図19)、815年に即位したシフヤフ・キン・チャーク Sihyaj K'in Chaak 2世は、マヤの王が持つ一般的な称号である「クフル・アハウ(神聖王)」“K'uhul Ajaw”に加えて、「ウィ・テ・ナーフ球技者」“[Wi]jte'naah pitzil”として言及されている(図15)(García-Gallo 2011:222-223)。歴代マチャキラー王の中で、この称号を保持するのはこの王のみである。では、決して王朝創立者ではないシフヤフ・キン・チャーク2世が、なぜウィ・テ・ナーフ称号を保持しているのでしょうか。この疑問に関連すると思われるのが、近隣のカンクエンとの関係である。マチャキラーは、656年から657年までにカラクムルCalakmulによって創立されたカンクエンに従属していたのだが、この支配関係は800年頃に終息する(Demarest 2013:385; García-Gallo 2011:219)。シフヤフ・キン・チャーク2世が即位したのは、この頃である。こういう状況で王の座についた彼は、新王朝の創立者の存在を自認し、ウィ・テ・ナーフ称号を誇示したのではなかろうか。

⑩プシルハーの石碑P

マチャキラーの東80数kmほどの所に位置するプシルハーでは、表にプシルハー王カウィール・チャン・キニチK'awil Chan K'inichの肖像が彫られた石碑Pの背面に、長い碑文が刻まれている。前

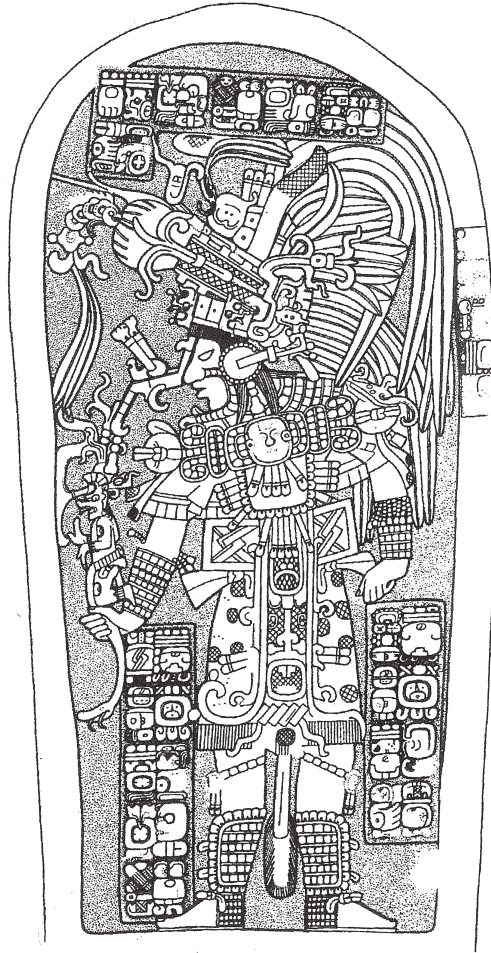


図 15 マチャキラの石碑 3 (García-Gallo 2011 Figura 10 を転載)

半には、同王が9.7.0.0.0 7アハウ 3カンキンK'ank'in (573年12月5日)の期間の終わりを祝ったことと、9.6.17.8.18 2エツナブEtz'nab 11セクSek (571年6月17日)に即位したことが記されている。そして、終わりの部分に、T600を表すと思われる文字、さらに「オシュ・カトゥン・チャホム(三カトゥンの撒く人)」「Ox K'atun Ch'ajom」という称号とカウィール・チャン・キニチ、「プシルハーの神聖王」がそれに続いている(図16)(Wanyerka 2009:350-355, 720-725)。これはプシルハーの紋章文字の最古の生起例なので、カウィール・チャン・キニチはプシルハーの初代王なのかも知れない(Wanyerka 2009:377-379)。なお、このモニュメントでは、9.10.15.0.0 6アハウ 13マック(747年11月7日)の期間の完了を祝ったことが記されているので、建立されたのはこの頃であろう。

① シャフハウゼンSchaffhausen万聖博物館所蔵の土器テキスト

スイスのシャフハウゼンにある万聖博物館(Museum zu Allerheiligen)に、土器の様式や刻まれた日付から686年に製作されたと思われる蓋付きの円筒型シリンドラー土器が収蔵されている(Prager 2004:31-39)。出土地は不明だが、カラクムル王のユクヌーム・チェーンYuknoom Ch'een 2世(636年即位)の名が刻まれていることから、カラクムル地域出土のものと思われる。この土器のふたの縁沿いに刻まれた13の文字テキストの中に、「チ・ウィツ」¹¹「Chi-Witz」に続いて、「ウィ・テ・ナーフの男」¹²という文字が記されている(図17)(Prager 2004:37-38)。前者は、古典期後期の王たちによって、自らの王朝の始祖や王朝の創立と関連する非常に重要な場所と意識されていた地名である(Hansen, et al. 2008:58-60; Prager 2004:37; Wanyerka 2009:317-326, 382-384, 534-535)。チ・ウィツもウィ・テ・ナーフも、いずれも接頭辞として地名の前に置かれ、男性動作主を表わす「アフ」「aj」に伴われていることから(Macri andLooper 2003:272)、このウィ・テ・ナーフは地名として使われている可能性が高い。そして、カーン王朝も、ユクヌーム・チェーン2世、あるいはその前代に首都をツイバンチュー Dzibanchéからカラクムルに移しているのである。仮に遷都が前代王の「ユクヌーム頭」王の治世に行われたとしても、彼の治世は630年からの7年ほどに過ぎず、50年もの長きにわたる治世を誇り、カラクムルの最盛期を現出したユクヌーム・チェーン2世とは比較にならない。従って、地名的な使われ方をしているこのウィ・テ・ナーフも、王朝創立的な含意があるとも考えられる。

(2) 新ウィ・テ・ナーフ文字の意味

古ウィ・テ・ナーフ文字に比べて事例の多い新ウィ・テ・ナーフ文字が示す意味を考えると、ティカルのMT35、コパンの祭壇Q、キリグラーの動物形態碑P、ヤシュチランのリンテル25の場合は、即位儀礼に関連する建物を指しているように思われる。また、マチャキラーの石碑3とプシルハーの石碑Pの事例には、新体制の樹立も含めて、王朝創立的意味合いが感じられる。コパンの石碑12、建物10L-16、建物10L-29、リオ・アマリージョの建物5の場合は、コパン王国の創立者である

¹¹ この文字には、この他にも「チー玉座の地」「Chi-Throne Place」、「チーカワックの地」「Chi-Kawak Place」、「曲がったカワックの地」「Bent Kawak Place」、「チー祭壇の地」「Chi-Altar Place」等、様々な呼称がある(Wanyerka 2009:317)。

¹² aj wi' nah (Prager 2004:37)。

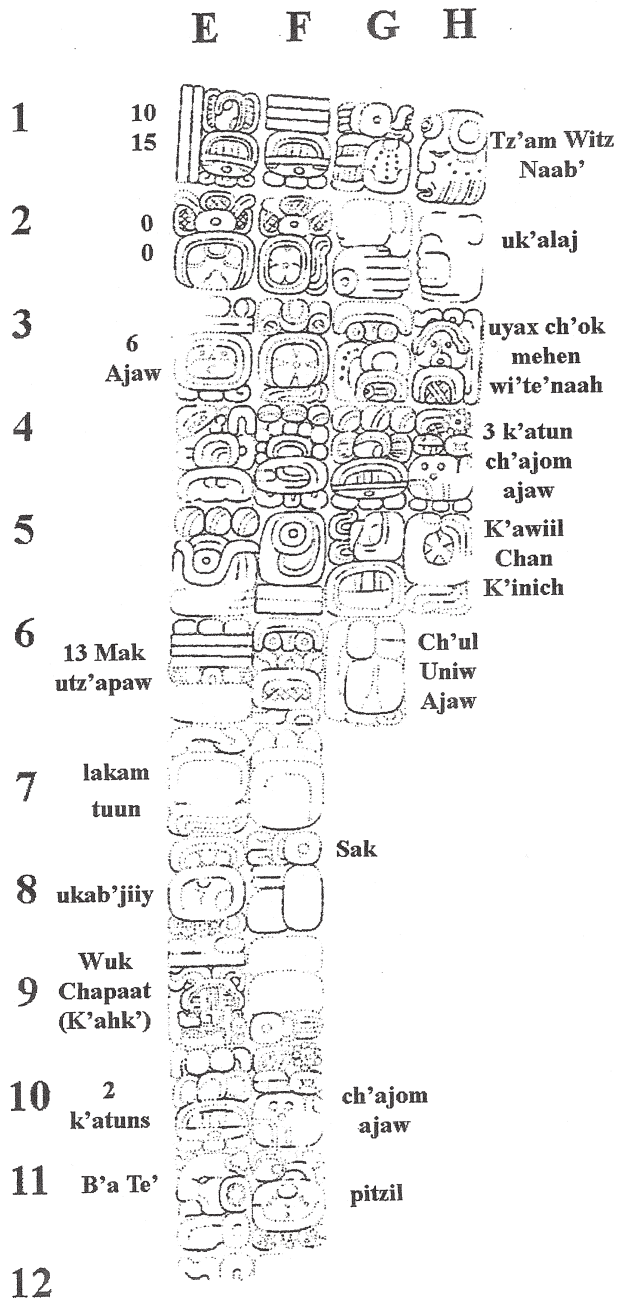


図 16 プシルハーの石碑 P 背面の一部 (Wanyerka 2009 Figure 7.29 を転載)

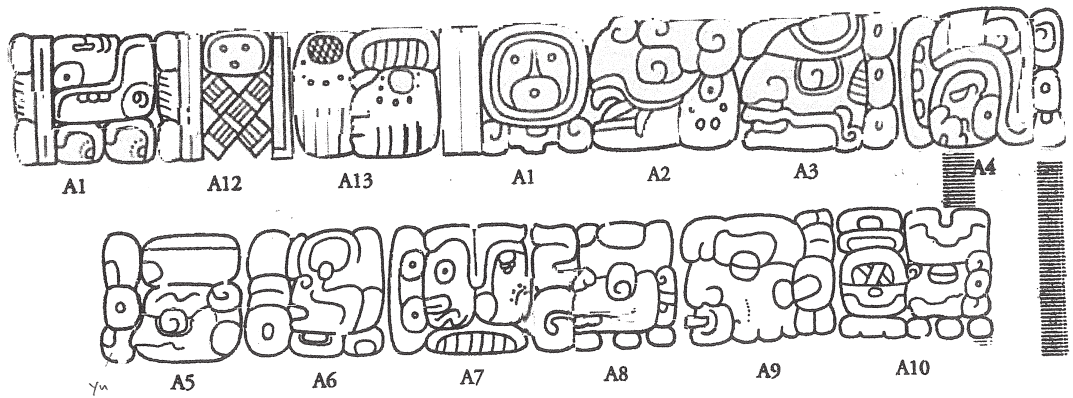


図 17 シャフハウゼン万聖博物館蔵の円筒シリンダー型土器のテキスト (Prager 2004 Figure 12.を転載)

キニチ・ヤシュ・クック・モを表していると思われる。

以上の点から鑑みて、新ウィ・テ・ナーフ文字は、新たな体制を築くことにつながる王の即位儀礼が行われた建物の呼称がもともとの意味で、派生的に王朝創立や新体制樹立、さらにはそれを成し遂げた個人を指すことになったものではなかろうか。オブレゴンの木箱やシャフハウゼンの万聖博物館所蔵の土器テキストの場合も、コパンのキニチ・ヤシュ・クック・モのように、後世に国家そのものを体現するような創始者によって建国された国を指すのかも知れない。

4、ウィ・テ・ナーフ文字の異同と分布

ウィ・テ・ナーフを表す二種の文字に関して、具体的な実例を列挙して、どこでどのような文脈で言及されているのかを別々に検討してきた。その結果、いずれの文字も似た意味合いで使われた可能性が高いことが判明した。すなわち、根本となるのは新王朝を創始した人物が即位儀礼を行った建物の呼称であった。そこから新王の即位による国家ないしは王朝の創始、その後派生的に創始者個人や、彼によって体現される国家を表すようになっている。

二種類のウィ・テ・ナーフ文字が遺された遺跡は、規模の観点から見ると、トレス・イスラスのような小規模な都市があればティカルやコパンのような主要都市もあり、一様ではない。しかし、その分布を見ると、いずれもが低地南部マヤ社会の交易ルートに沿った地点に位置していることがわかる（図18）。たとえば、パシオン川の中流に位置するカンクエンは、パシオン川という水路を通じての交易と陸路での交易の中継地として、長期にわたって重要であったことが知られている（図19）（Demarest 2013:377, 384, 389-390）。すなわち、水路や陸路を利用することで、北西のメキシコ湾岸、東のカリブ海、南のグアテマラ山地とつながっていた。そして、このカンクエンを中継地とした交易ルートに面しているのが、トレス・イスラス、マチャキラー、ヤシュチラン、ピエドラス・ネグラス、エル・ペルー、プシルハー、ティカルのように、ウィ・テ・ナーフ文字が生起するモニュメントを擁する遺跡なのである。コパン周辺のキリグアーやリオ・アマリージョも、コパンを建国した勢力が拠点として築いた都市であり、かつ河川流域にある。コパン建国にペテン地方の勢力がかかわっていたとすれば、古くから交通が通じていたこの地域への進出は、交易ルートの拡大が目的であったことは間違いない。

事実、古典期前期には中央ペテンの勢力が陸上および水上の交易に直接参加していたようであり、ペテン地方から遠く離れたトレス・イスラスやその近郊のプンタ・デ・チミノ Punta de Chimino でも、5世紀頃の中央ペテン様式のモニュメントや土器が見られる¹³（Demarest 2013:384, 386）。従って、古典期前期のトレス・イスラで、ティカルやエル・ペルーのモニュメントのものと同一の古ウィ・テ・

¹³ トレス・イスラスの石碑3に描かれた人物の肖像や装身具は、ティカルの石碑31や石碑4のヤシュ・ヌーン・アヒーン1世を想起させる（Tomasic y Fahsen 2004:800）。また、プンタ・デ・チミーノの墳墓103の被葬者の骨のストロンチウム分析の結果、この人物がマヤ中央低地出身であることが判明した（Bachand 2010:32）。

¹⁴ トマシからは、古典期後期から終末期にカンクエンが担っていた、パシオン川を通じてメキシコ中央高原とマヤ低地南部をつなぐ重要な交易基地としての役割を、古典期前期にトレス・イスラスが果たしていたと推測している（Tomasic y Fahsen 2004:802）。

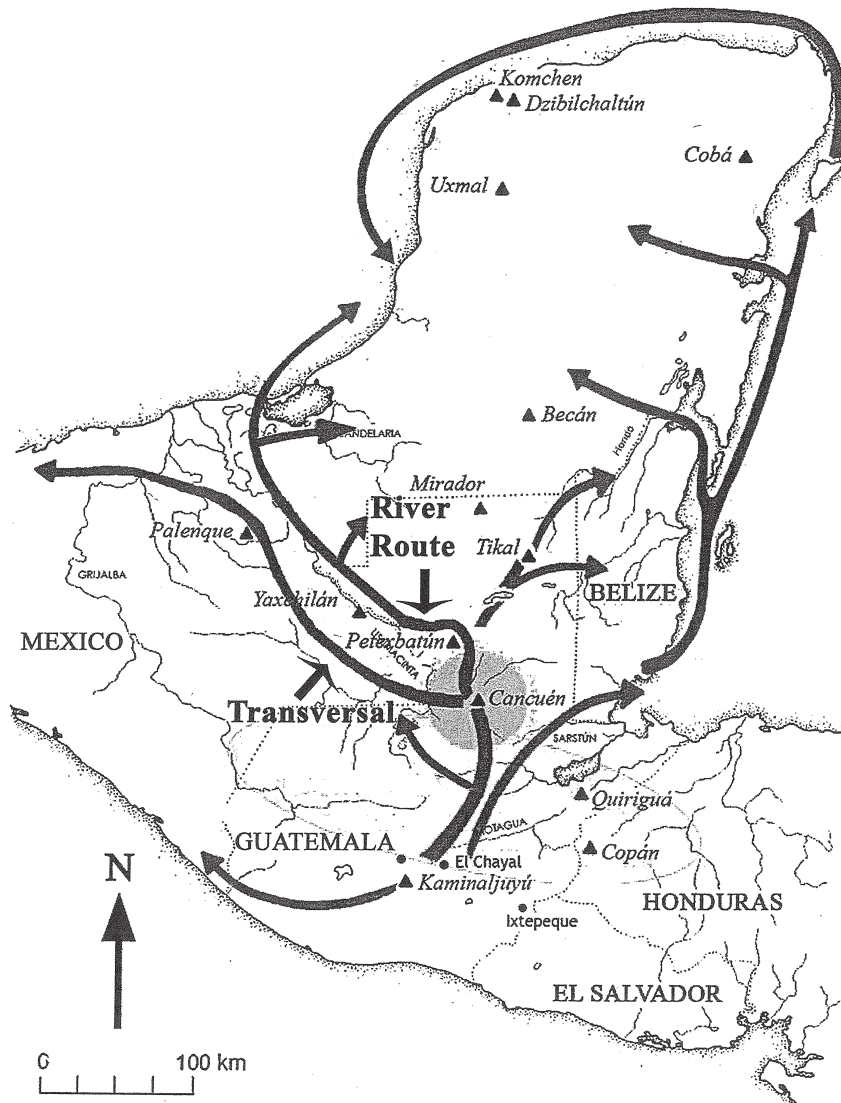


図 18 マヤ地域の主要交易ルート (Demarest 2013 Figure 1.を転載)

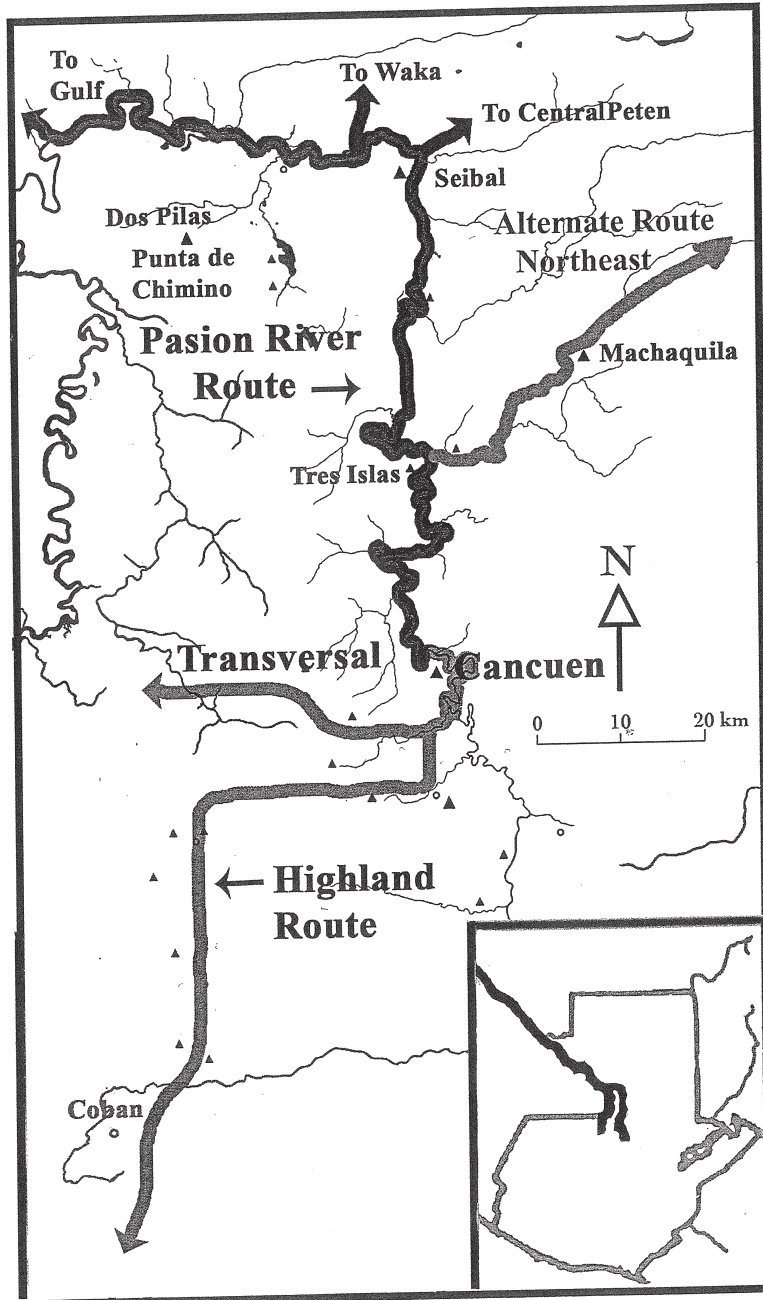


図 19 パシオン川周辺の交易ルート（Demarest 2013 Figure 2.を転載）

ナーフ文字が生起していても、何の不思議もないのである¹⁴。

では、古ウィ・テ・ナーフ文字が500年頃を最後に使われなくなり、650年頃を過ぎてから別の主文字を持つ新ウィ・テ・ナーフ文字が現われるようになったのはなぜであろうか。この問題について、次章で検討したい。

5、ウィ・テ・ナーフ文字生起の意味

(1)「ウィ・テ・ナーフ=テオティワカンの神殿」説

ウィ・テ・ナーフをテオティワカンと強い結びつきのある建物と考えている研究者は少なくない¹⁵。その根拠としては、次のような点が挙げられる。

一つは、ティカルの石碑31やエル・ペルーの石碑15で、テオティワカンから派遣された軍指揮官の可能性さえ指摘されているシフヤフ・カフクとの関連で、ウィ・テ・ナーフ文字が生起している点である。また、テオティワカンとの関係が示唆されるキニチ・ヤシュ・クック・モがウィ・テ・ナーフで即位儀礼を行ったらしいことと、彼自身後世の王から「ウィ・テ・ナーフ」の異名で呼ばれていることである。さらには、ウィ・テ・ナーフが生起しているトレス・イスラスの石碑に彫られた人物像が、テオティワカンの戦士を想起させる装いをしていることも挙げられよう(図7)。いずれの例にしても、仮にテオティワカンとの関連性は指摘できても、ウィ・テ・ナーフがどこにあったかを特定できるものではない。

これに対し、ウィ・テ・ナーフがテオティワカンにあった可能性を明瞭に主張する研究者もいる。ファーシュらは、以下のことを根拠に、テオティワカンの太陽のピラミッドの西の基部に張り出している基壇アドサダAdosada(図20)こそが、ウィ・テ・ナーフそのものだったと推測している(Fash et al. 2009:202-221)。一つは、後古典期後期のメキシコ中央高原では、「新しい火」を起こすことは新しい国家を創立することに等しかったこと。また一つは、テオティワカンが王位への任命が行われた場所として知られていたと、サアグンSahagún¹⁶のインフォーマントが証言していること。さらに、T600は、『ボルボニクスBorbonicus絵文書』¹⁷に描かれた、四人のアステカの神官がそれぞれ薪の束を持ち、交差するようにして「新しい火の儀礼」を行う光景に酷似していること(図21)(Fash et al. 2009:206)。太陽のピラミッドの地下には人工の洞窟が掘られているのだが、その最も重要な意義は、ここが出現の場所すなわち「起源の家」だと示すためであること。そして、この太陽のピラミッドに附設するアドサダこそが「新しい火の儀礼」が行われた場所であり(図22)、この儀礼は王権と結びついていたと考えられること、である。これらのことから、低地南部マヤ地域の王が即位儀礼を行ったウィ・テ・ナーフとは、テオティワカンのアドサダに他ならないと結論づけた。ティ

¹⁵ Freidel et al. 2007a:193; Guenter 2005:371; Martin and Grube 2008:192を参照。

¹⁶ ベルナルディーノ・デ・サアグンBernardino de Sahagún。16世紀にメキシコで布教活動に従事したフランシスコ会士で、アステカ社会に関する百科全書的な著作を遺した。

¹⁷ スペイン人による征服直後、1530年以前頃に作成された絵文書で、アステカの祭礼が詳述されている(Miller and Taube 1993:194)

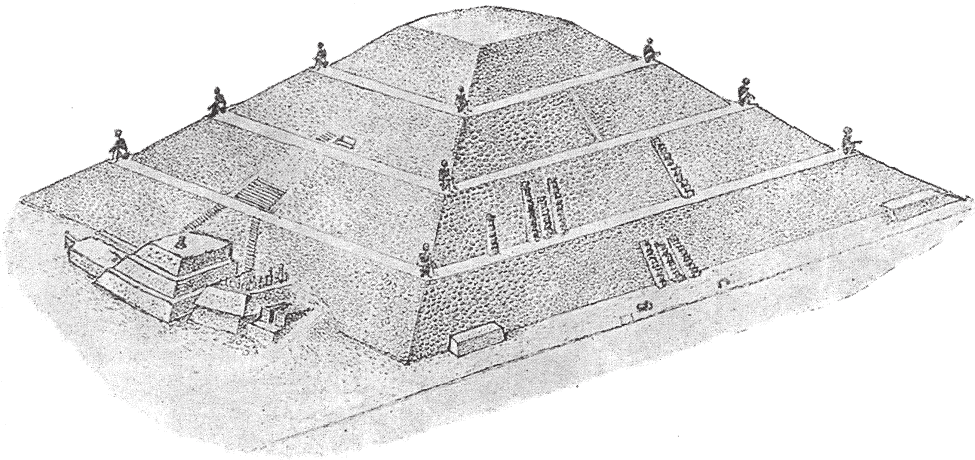


図 20 テオティワカンの太陽のピラミッドとアドサダの想像復元図（Fash et al. 2009
FIGURE 2.を転載）

カルの石碑31やコパンの祭壇Qのテキストに、ウィ・テ・ナーフが遠隔地にあると受け取られるような記述が見られるのも、実際に遠く離れたテオティワカンにあったからというわけである。ファースチュラによれば、古典期前期のマヤの王はテオティワカンまで旅をし、同地のアドサダで即位儀礼を行うことで王権を授与された。他方、古典期後期の王は自らの王権を正当化するために、アドサダで行われた儀礼を想起させるような新ウィ・テ・ナーフ文字を用いた。

(2) ウィ・テ・ナーフはテオティワカンにあったのか

確かに、T600を「新しい火」の儀礼と関連付ける見解は興味深い。アステカの「新しい火の祭り」の儀礼では、過ぎ去った52年間を象徴する棒の束に火がつけられた。こうして燃え上がった炎が、新しい年が始まることを保証すると考えられた(Miller and Taube 1993:87)。すなわち、新年を迎えるにあたって、棒の束が不可欠な道具として用いられているのである。ここで「新しい年」を「新しい王朝」に置き換えて考えると、新王朝樹立の儀礼のために必要な燃やすべき古い王朝を象徴するものとして、「交差する薪の束」、すなわちT600が使用されたと解釈できる。先述したように、王朝の始祖と深い関係性を持つカウィール神は、同時に火の神でもある。従って、「過去」に火をつけることによって、「未来」の到来を祝う儀礼にT600が用いられたというこの解釈は、十分に妥当性がある。

また、コパンの祭壇Qに記されているキニチ・ヤシュ・クック・モの即位の過程から判断して、もともとウィ・テ・ナーフが遠隔地、たとえばテオティワカンにあった可能性はあり得る。ティカルの石碑31の碑文からも、ヤシュ・ヌーン・アヒーンが即位した場所が、ティカルから遠く離れたテオティワカンだったと解釈することもできる。ただし、これを明確に証明する史料はない。

(3) ウィ・テ・ナーフ文字に二つの異形がある理由

新たな王国なり王朝なりを樹立しようとする、それを裏付けるだけの権威が必要となる。ティカルで政変が起こったり、またキニチ・ヤシュ・クック・モがコパン王朝を創立したりした頃、メソアメリカで圧倒的な存在感を持っていた国はテオティワカンであった。この当時、既に太陽のピラミッドや月のピラミッドなどの巨大建築物が建設され、威容を誇っていた。低地南部マヤ社会は、先古典期のナクベやエル・ミラドールが示すように、テオティワカンよりも早く発達し、また都市の規模も同時代のテオティワカンを遥かに凌駕していた。しかしながら、先古典期が終わる頃にはこれらの巨大都市は放棄され、それとは対照的に紀元後に入る頃からテオティワカンの目覚ましい発展が始まる。こうして、古典期前半には、都市文明としての両者の差は隔絶したものになっていた。メソアメリカ地域では早くから長距離交易が発達していたので、碁盤目状に巨大建築が展開するテオティワカンのことは、交易網を通して知られていたであろう。また、ナクベやエル・ミラドール滅亡後、壮大な都市をまだ持たない低地南部マヤ社会にとって、その存在は羨望の的だったはずである。低地南部マヤ社会で国家を建設しようとする際、あるいは王権を認めてもらい、その権威を他国に対して誇示する存在として、テオティワカンほどふさわしい国はなかったであろう。このように、古典期前期のマヤ社会では、傑出した大国であるテオティワカンに王としての正当性を認め

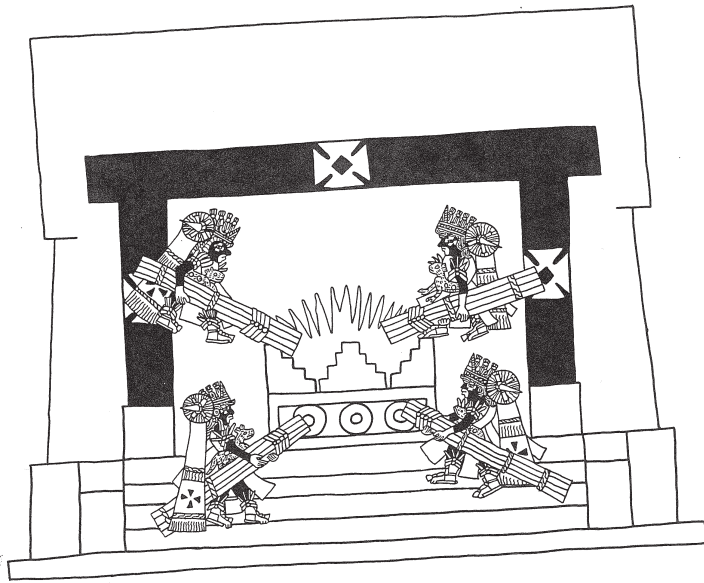


図 21 『ボルボニクス絵文書』の 34 ページ (Fash et al. 2009 FIGURE 3.を転載)

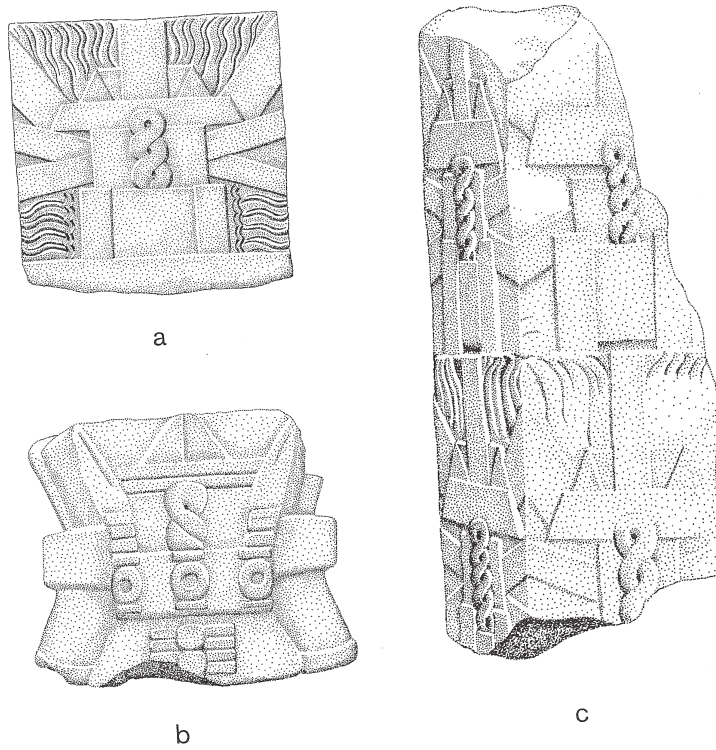


図 22 「新しい火の儀礼」を想起させるアドサダの石彫 (Fash et al. 2009 FIGURE 5.を転載)

られることで、王権を樹立あるいは強化すると同時に、他国に対してテオティワカンの権威に裏付けられた高い地位を誇示しようとしたのではなかろうか。そのための即位の場がウィ・テ・ナーフだったのである。

ただし、仮にマヤ人がテオティワカンに赴き、そこで即位儀礼を行うことによって王位についたことを承認されたにしても、これはマヤ人の側の自発的行為であって、決してテオティワカンによる支配が前提として存在したわけではないであろう。この当時の政治的支配には、必然的に軍事力が伴っていたはずである。直接的支配圏がメキシコ盆地と隣接地域を含む25000km²ほどだったと考えられているテオティワカンが、遠く離れた、しかも環境も大きく異なるマヤ地域に直接武力侵攻したり、ましてや征服による領土支配をしたことは、兵站的観点から見て現実的ではない¹⁸。

もっとも、だからと言って、マヤ地域にテオティワカン人が足を踏み入れることが決してなかったと主張しているのではない。アステカ時代のポチテカpochteca¹⁹の先駆的集団がテオティワカンに既に存在していたとすれば、マヤ地域との交易の推進を図る彼らと、テオティワカンという存在を後ろ盾として権威の確立を狙ったマヤ人の一派が軍事的および経済的に提携し、その結果テオティワカン人がマヤ地域に進出したことはあり得るであろう（Freidel et al. 2007a:193）。しかし、この場合もあくまでマヤ人の側に自発的な意思が働いていたと思われる。つまり、利害関係を考慮した上で、自分たちにも利があると判断したからこそ、テオティワカン人の進出を認めたのである。

では、古ウィ・テ・ナーフ文字が、現実にはせよあるいは象徴にせよ、テオティワカンの権威に依拠した王権の樹立を意味するものとするならば、500年頃以降使われなくなる理由はなぜであろうか。そこには、二つの事情が関連しているように思われる。一つは、6世紀以降のテオティワカンの急速な衰退である。王権がテオティワカンという外来の権威に基づいていたのであれば、その権威の源が力を失うことによって、ウィ・テ・ナーフで即位することには意味がなくなるであろう。もう一つは、ティカル勢力の弱体化である。恐らくは1～2世紀頃に王権が確立したティカルは、マヤ低地南部で傑出した地位を確立し、その後4世紀後半にテオティワカンの権威のもとに新たに国家の体制を整えた国である。エントラダ事件後の最初の王であるヤシュ・ヌーン・アヒーンは、恐らくはウィ・テ・ナーフで即位している。このティカルでも、6世紀に入る頃から内政に混乱が見られるようになる。そして、長く衰勢にあったティカルを復興させたのが、9.12.9.17.16 5キブ Kib 14ソツツ（682年5月3日）に即位したハサウ・チャン・カウィール1世であった。このように、ウィ・テ・ナーフ文字が生起しない期間は、ティカルの勢力が沈滞していた時期とほぼ重なるのである。古ウィ・テ・ナーフ文字が最初に生起するのは、ティカルの政変に関連してのことであった。ウィ・テ・ナーフ文字の普及自体も、ティカル勢力の伸長を反映しているのかも知れない。このこ

¹⁸ テオティワカンの戦士らしき装いをした人物像が、マヤ地域のいくつかの遺跡に描かれていることを根拠に、テオティワカンが軍事的にマヤ地域に侵攻したと唱える研究者はいるが、兵站的観点からこの軍事行動の可能性を検証した研究は皆無である。

¹⁹ ポチテカとは、アステカ社会で特異な地位を占めた高位の世襲商人集団である。彼らは、王家や国家のためにしばしば遠隔地まで出かけて交易を行った。時には現代で言う諜報活動も行ったとされ、しばしば武装もしていたとされる。

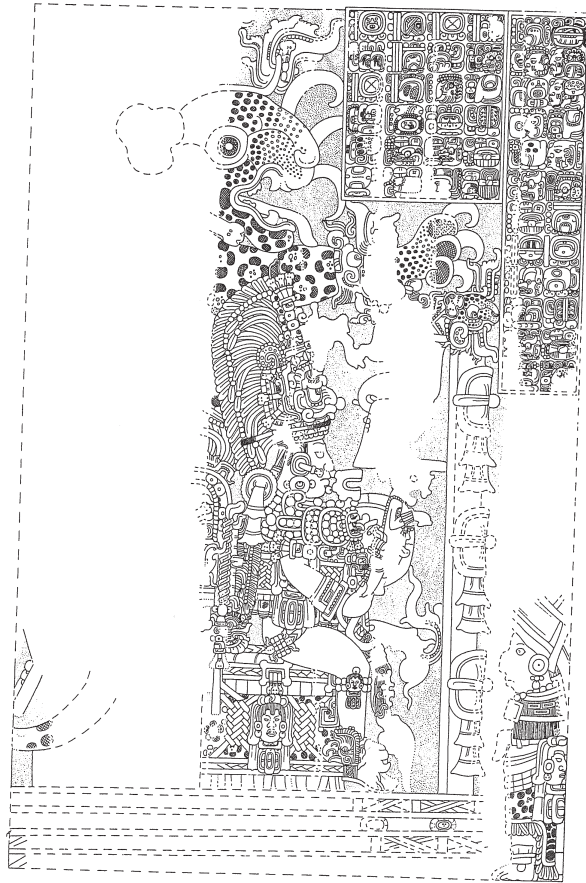


図 23 ティカルの神殿 I のリントル 3 (Harrison 1999 77 を転載)

とは、古ウィ・テ・ナーフ文字がティカルとの（少なくともペテン地方との）関係の可能性が指摘されている都市で生起していることから窺える。

そして、新ウィ・テ・ナーフ文字が出現するのは、ティカルが復興する頃である。ティカルを強国として復活させたハサウ・チャン・カウィール1世は、自分の権威の確立にテオティワカンのシンボリズムを活用している。一例を挙げると、神殿Iの木製のリンテル3には、ハサウ・チャン・カウィールがテオティワカンの戦士の装いで表現されている（図23）（Martin and Grube 2008:45）。しかも、これはティカルを衰勢に追いやったカラクムルに対する戦勝記念の儀式を描いたものであるが、この儀式が催されたのは、エントラダ後に最初に即位したヤシュ・ヌーン・アヒーン1世の父である「槍投げ器フクロウ」の死の13カトゥン記念の日である。つまり、ハサウ・チャン・カウィールは、テオティワカン勢力を背景に権力の座につき、恐らくはウィ・テ・ナーフで即位したであろう最初の王の直系の子孫であり、彼の治世に現れ始めるのが新ウィ・テ・ナーフ文字なのである。このように、新ウィ・テ・ナーフ文字の出現には、ティカル復興のシンボリック的意味合いがあったのではないかと思われるのである。

では、なぜT600という別の主字を持つ文字を創出したのであろうか。かつてヤシュ・ヌーン・アヒーンやキニチ・ヤシュ・クック・モが即位のために実際にテオティワカンに行ったとしても、ハサウ・チャン・カウィールの時代には既にテオティワカンは滅びており、ウィ・テ・ナーフでの即位に現実的な意味はない。その代り、数百年にわたってメソアメリカの盟主的地位にあったテオティワカンという巨大な国家は、滅亡後には神話的な価値を有する存在になっていたのではなかろうか。従って、神話的な都のウィ・テ・ナーフでの即位というものが、象徴的な重要性を帯びることになっていったと思われるのである。だからこそ、文字自体も、ウィ・テ・ナーフでの即位儀礼を視覚的に示すようなT600に変えたのではなかろうか。すなわち、テオティワカンという神話的過去の記憶を利用することによって権威の誇示を図ったのであり、そのシンボルこそが新ウィ・テ・ナーフ文字だったのである。

6、おわりに

本論考では、ウィ・テ・ナーフはテオティワカンの建物（太陽のピラミッドのアドサダ）、ないしはテオティワカンの権威に由来するマヤ地域の建物であり、古典期のマヤのエリートが新たな王朝を樹立するに当たって、テオティワカンという当時の巨大勢力を権威の後ろ盾として即位する目的で儀礼的に用いられたものだと考えた。そしてその嚆矢はペテン地方、恐らくはティカルに求められるであろう。本来は建物の名称であったウィ・テ・ナーフが、次第に個人の異名や、あるいは王朝創立という特別な出来事の名称などに転化して使われるようになったものと思われる。

テオティワカンとマヤ諸王国の関係は、中国を宗主国とする東アジア世界の冊封体制的なものと言えるかも知れない。冊封体制下の諸国は、日本も含め、必ずしも中国に軍事的・政治的に実際に支配されていたわけではなかった。しかし、中国と冊封関係を結び権威の正統性を認めてもらうこ

とが、自国内での権力の安定化につながると判断し、自ら進んで冊封関係を結んだのであった。マヤの王国にとっても、遥かに巨大な存在であったテオティワカンと関係を結ぶことは、権力を競い合う自国内の集団に対してだけでなく、他国に対しても自らの立場の優位性を誇示し、権力の強化・安定化を図るのに有効だと考えられたのであろう。

従って、テオティワカンとマヤの関係は、支配・被支配ではなかったと思われる。テオティワカンが古典期マヤ社会に及ぼした影響を具体的に示すものは、歴史的資料と、遺物や遺構から成る考古学的資料に大別できる。前者は、石造モニュメントや建築物、遺物に刻まれた文字テキストや描かれた図像である。後者には、タルー=タブレーロTalud-Tabero様式建築、パチューカPachuca産緑色黒曜石製品、薄手オレンジ土器や円筒形三脚土器などの土器等が挙げられる(佐藤 2004:27)。これらは、テオティワカンと低地南部マヤ社会との間に持続的な交流があったことを示すものではあっても、両者の間に支配・被支配の関係があった証拠にはならない(Sharer and Martin 2005:88; 佐藤 2004)。低地南部マヤ社会のエリートたちは、自らの権威の確立や権力の強化のために、自発的かつ意図的にテオティワカンを利用したのである。

参考文献

佐藤孝裕

2004 「11EbのEntrada—A.D. 378のティカルの政変—」『史学論叢』第34号、26-54頁。

2005 「キニチ・ヤシュ・クック・モのコパン建国とテオティワカン」『マヤとインカー—王権の成立と展開—』、貞末堯司編、75-92頁、同成社。

Anaya, Armando H.

2006 The Epigraphic Evidence. In *Strategic Location and Territorial Integrity: The Role of Subsidiary Sites in the Classic Maya Kingdoms of the Upper Usumacinta Region*.

Intarch.ac.uk/journal/issue19/3/5.html

Anaya, Armando H., Stanley Guenter, and Peter Mathews

2002 An Inscribed Wooden Box from Tabasco, Mexico.

<http://www.mesoweb.com/reports/box.index.html>

Anaya, Armando H, Peter Mathews, y Stanley Guenter

2003 Hallazgo de una caja de madera con inscripciones en Tabasco. *Arqueología Mexicana*, num.61, pp. 4-5.

Andrews, E. Wyllys and Cassandra R. Bill

2005 A Late Classic Royal Residence at Copan. In *Copán: The History of an Ancient Maya Kingdom*, edited by E. Wyllys Andrews and William L. Fash, pp. 239-314. Santa Fe: School of American Research Press.

Bachand, Bruce R.

2010 Onset of the Early Classic Period in the Southern Maya Lowlands: New Evidence from Punta de Chimino, Guatemala. *Ancient Mesoamerica*, 21, pp. 21-44.

Bell, Ellen E., Marcello A. Canuto, and Robert J. Sharer, ed

2004 *Understanding Early Classic Copan*. Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.

Braswell, Geoffrey E., ed.

2003 *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*. Austin: University of Texas Press.

Demarest, Arthur

2004 *Ancient Maya: The Rise and Fall of a Rainforest Civilization*. Cambridge: Cambridge University Press.

2013 Ideological Pathways to Economic Exchange: Religion, Economy, and Legitimation at the Classic Maya Royal Capital of Cancún. *Latin American Antiquity*, vol. 24, num. 4, pp. 371-402.

Estrada-Belli, Francisco

2009 A Maya Palace at Holmul, Peten, Guatemala and the Teotihuacan "Evidence" : Evidence from Murals 7 and 9. *Latin American Antiquity*, vol. 20, num. 1, pp. 228-259.

Fash, William L.

2001 *Scribes, Warriors and Kings: The City of Copán and the Ancient Maya. Revised Edition*. London: Thames and Hudson Ltd.

Fash, William L., Alexandre Tokovinine, and Barbara Fash

2009 The House of New Fire at Teotihuacan and its Legacy in Mesoamerica. In *The Art of Urbanism: How Mesoamerican Kingdoms Represented Themselves in Architecture and Imagery*, edited by William L. Fash and Leonardo López Luján, pp. 201-229. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Freidel, David y Hector L. Escobedo

2004 Síntesis de la primera temporada de campo del proyecto arqueológico de El Perú-Waka'. In *Proyecto Arqueológico El Perú-Waka'. Informe No.1, Temporada 2003*, editado por Héctor L. Escobedo y David Freidel, pp. 409-420. Dallas: Universidad Metodista del Sur.

2005 Eliminando a los reyes sagrados y restableciendo a los dioses: algunas consideraciones generales de la segunda temporada de campo en El Perú-Waka', Petén. En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editado por J. P. Laporte, B. Arroyo, H. Escobedo y H. Mejía. Guatemala: Museo Nacional de Arqueología y Etnología.

Freidel, David, Héctor L. Escobedo, and Stanley P. Guenter

2007a A Crossroads of Conquerors: Waka' and Gordon Willey's "Rehearsal for the Collapse" Hypothesis. In *Gordon Willey and American Archaeology*, edited by Jeremy A. Sabloff and William L. Fash, pp. 187-208. Norman: University of Oklahoma Press.

Freidel, David, Héctor Escobedo, David Lee, Stanley Guenter y Juan Carlos Meléndez

2007b El Perú-Waka' y la ruta terrestre de la dinastía Kan hacia el altiplano. In *XX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2006*, editado por J. P. Laporte, B. Arroyo y H. Mejía, pp. 59-76. Guatemala: Museo Nacional de Arqueología y Etnología.

García-Gallo, Alfonso Lacandena

2011 Historia y ritual dinásticos en Machaquilá. *Revista Española de Antropología Americana*, vol. 41, num. 1, pp. 205-240.

Guenter, Stanley Paul

2005 Informe preliminar de la epigrafía de El Perú. En *Proyecto Arqueológico El Perú-Waka': Informe No. 2, Temporada 2004*, editado por Hector L. Escobedo y David Freidel, pp. 359-398. Dallas: Universidad Metodista del Sur.

Hansen, Richard D., Wayne K. Howell, and Stanley P. Guenter

2008 Forgotten Structures, Haunted Houses, and Occupied Hearts: Sites and Buildings in the Mirador Basin, Guatemala. In *Ruins of the Past: The Use and Perception of Abandoned Structures in the Maya Lowlands*, edited by Travis W. Stanton and Aline Magnoni, pp. 25-64. Boulder: University Press of Colorado.

Harrison, Peter D.

1999 *The Lords of Tikal: Rulers of an Ancient Maya City*. London: Thames and Hudson Ltd.

Looper, Matthew G.

2001 Documentation of Sculptures at Quiriguá, Guatemala. FAMSI.

Macri, Martha J. and Matthew G. Looper

2003 *The New Catalog of Maya Hieroglyphs, Volume 1, The Classic Period Inscriptions*. Norman: University of Oklahoma Press.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2000 *Chronicles of the Maya Kings and Queens*. London: Thames and Hudson Ltd.

2008 *Chronicles of the Maya Kings and Queens. 2nd Edition*. London: Thames and Hudson Ltd.

Miller, Mary and Karl Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. London: Thames and Hudson Ltd.

Schele, Linda and David Freidel

1990 *A Forest of Kings: The Untold Story of the Ancient Maya*. New York: William Morrow.

Prager, Christian M.

2004 A Classic Maya Ceramic Vessel from the Calakmul Region in the Museum zu Allerheiligen, Schaffhausen, Switzerland. *Human Mosaic* 35 (1), pp. 31-39.

Schele, Linda and Peter Mathews

1998 *The Code of Kings: The Language of Seven Sacred Maya Temples and Tombs*. New York: Scribner.

Sharer, Robert J.

2003a Tikal and the Copan Dynastic Founding. In *Tikal: Dynasties, Foreigners & Affairs of State: Advancing Maya Archaeology*, edited by Jeremy A. Sabloff, pp. 319-353. Santa Fe: School of American Research Press.

2003b Founding Events and Teotihuacan Connections at Copán, Honduras. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Geoffrey E. Braswell, pp. 143-165. Austin: University of Texas Press.

Sharer, Robert J. and Simon Martin

2005 Strangers in the Maya Area: Early Classic Interaction with Teotihuacan. In *Lords of Creation: The Origins of Sacred Maya Kingship*, edited by Virginia M. Fields and Dorie Reents-Budet, pp. 81-89. Los Angeles: Los Angeles County Museum of Art.

Stuart, David

2000 "The Arrival of Stranger" : Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by David Carrasco, Lindsay Jones, and Scott Sessions, pp. 465-513. Boulder: University Press of Colorado.

2004 The Beginning of the Copan Dynasty: A Review of the Hieroglyphic and Historical Evidence. In *Understanding Early Classic Copan*, edited by Ellen E. Bell, Marcello A. Canuto, and Robert J. Sharer, pp. 215-264. Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.

2007 The Origin of Copan's Founder, Maya Decipherment. <http://decipherment.wordpress.com/2007/06/25/the-origin-of-copans-founder/>

Tate, Carolyn E.

1992 *Yaxchilan: The Design of a Maya Ceremonial City*. Austin: University of Texas Press.

Tokovinine, Alexandre Andreevich

2008 The Power of Place : Political Landscape and Identity in Classic Maya Inscriptions, Imagery, and Architecture. Ph.D. thesis, Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge.

Tomasic, John y Federico Fahsen

2004 Exploraciones y excavaciones preliminares en Tres Islas, Péten. En *XVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2003*, editdo por J. P. Laporte, B. Arroyo, H. Escobedo y H. Mejía, pp. 794-809.

Tomasic, John, Claudia M. Quintanilla y Edy Barrios

2005 Excavaciones en el sitio arqueológico Tres Islas, Río Pasión, Petén. En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004*, editdo por J. P. Laporte, B. Arroyo, H. Escobedo y H. Mejía.

Traxler, Loa P.

2001 The Royal Court of Early Classic Copán. In *Royal Courts of the Ancient Maya*, edited by Inomata Takeshi and Stephen Houston, pp. 47-73. Oxford: Westview Press.

Trik, Aubrey S.

1963 The Splendid Tomb of Temple I at Tikal, Guatemala. Expedition, vol. 6, num. 1, pp. 1-18.

Wanyerka, Phillip Julius

2009 Classic Maya Political Organization: Epigraphic Evidence of Hierarchical Organization in the Southern Maya Mountains Region of Belize. Ph.D. theis, Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale.